

空 楽 々

「くらし」

2018

冬





2018年 空デ秋イベントから



秋の空デエクスカージョン（関西） 「陶器も空間も楽しむ。 空デ久々の信楽満喫ツアー」 2018年11月3日(金・祝)

関西では、空間演出デザインコースに縁の深い滋賀県の信楽（甲賀市）での開催となりました。空デエクスカージョンでは久しぶりの訪問となりましたが、当日は遠くは石川県や静岡県、広島県からの参加者も含めて20名ほどの学生が参加しました。

最初に訪問した滋賀県立陶芸の森では館長である松井利夫先生からお話を伺いました。松井先生は実は所属は空デであり、通信では大学院の先生です。また、いろいろな場でお会いする空デではおなじみの先生です。松井先生には陶芸の森の中にある創作研修館も案内していただきました。（写真1,4）

その後は、上田篤先生がリノベーションに関わられた文五郎倉庫を訪問しました。この文五郎倉庫は、今から10年ほど前に、遺産化する信楽の過去を再発見、再認識し、それぞれを新たな要素として町全体を繋ぎ合わせていくことで、陶芸という産業を活用した新たな産地づくりのきっかけとなるよう企画されたそうです。文五郎窯にある築50年の倉庫を改築したもので、杉板型枠によるコンクリートと壁に残された泥の手形という印象的な表情を残すために、必要箇所だけにパッチワークを施す「補修」を基本方針としたとのこと。ここでは文五郎窯の奥田文悟さん、奥田章さんにお話を伺うとともに、制作現場を見学させていただきました。（1ページ写真上）

盛りだくさんでやや時間が足りませんでしたが、自由行動での散策も含めて信楽を堪能した一日となりました。（写真2,3）



参考：文五郎倉庫 <http://www.bungoro.com>





秋の空デエクスカージョン（関東） 「建築家・榎田倫之先生と巡る、 江之浦測候所、MOA美術館見学ツアー」 2018年11月23日（金・祝）

関東では、空間演出デザインコースの専門演習スクーリング科目を担当されている建築家・榎田倫之先生のご案内で、榎田先生が芸術家・杉本博司さんとともに主宰する新素材研究所が手がけた二つの文化施設を見学しました。

最初に訪問したのは神奈川県小田原市にある小田原文化財団の江之浦測候所です。2017年7月にオープンしたばかりですが、完全予約制となっており、数ヶ月後分の予約で埋まっているそうです。ここはギャラリー棟、石舞台、光学硝子舞台、茶室、庭園、門、待合棟などから構成され、まだまだ拡張しつつけている施設とのことです。

到着した空デー行は入館時に手渡されたワイヤレスイヤホンからの榎田先生の解説を聞きながら、相模湾の青い海と箱根外輪山を借景とした空間とともに施設内の建築物や作品を見学しました。

夏至光遙拝100メートルギャラリー（写真3）や光学硝子舞台（写真4）のように硝子が印象的に使われている建築物があったり、あるいは明月門（写真2）のような移築した古い建築物があったりと見所が満載ですが、様々な場所から集められた石によって生み出される風景が印象的で、石舞台（1ページ写真下）や円形石舞台（写真1）のような石の建

造物によるものだけでなく、ひとつの石がそこに存在することによってその空間が形作られていることを感じさせてくれる施設でした。

各自昼食をとった後は静岡県熱海市にある MOA 美術館への訪問です。こちらは 2017 年 2 月にリニューアルオープンしました。新素材研究所は外観ではなく、共用部分となるロビーエリアや展示室、ショップ、カフェなどをリニューアルされたとのこと。ここでは、最初にメインエントランスへ向かう階段で榎田先生から美術館の外観の解説がありました。（写真5）そして編集部の一押しとなるメインエントランスへ。ここには漆芸家である人間国宝の室瀬和美さんによる漆塗の高さ4メートルの巨大なドアがありました。（写真6）ひっきりなしに人々が行き来するのでじっくりと観れないですが、必見だと思います。その後はロビー、展示室、ミュージアムショップと巡りながら、MOA 美術館では一番大切である展示作品をどのようにして見せる（魅せる）工夫をしているのかを、建築の様々な側面から榎田先生が詳細に解説してくださいました。（写真7）

樹齢数百年にもなる行者杉の框板や免震機能を備えた屋久杉の板床、思わず頭をぶつけてしまいそうになる低反射ガラスなど、日本伝統の技術や工法・素材と現代建築の技術や工法・素材が融合することで作られた展示空間ということを確認しました。

榎田先生からは、それぞれの施設の解説に加えてエピソードなども話していただき、有意義な時間となりました。榎田先生、ありがとうございました。

参考 <https://www.odawara-af.com/ja/enoura/>
<http://www.moaart.or.jp/design/shinsozai/>



新素材研究所

新素材研究所は、現代美術作家の杉本博司と、建築家の榎田倫之によって 2008 年に設立された建築設計事務所です。彼らはその名称に反して、古代や中世、近世に用いられた素材や技法を研究し、それらの現代における再解釈と再興を活動の中核に据えています。全てが規格化され表層的になってしまった現代の建築資材に異を唱え、敢えて扱いが難しい伝統的素材の建築的な可能性を追求する。それは近代化の中で忘れ去られつつある高度な職人の技術を伝承し、さらにその技術に磨きをかけることでもあります。杉本博司と榎田倫之は、時代の潮流を避けながら、旧素材を扱った建築をつくることこそが、いま最も新しい試みであると確信し、設計に取り組んでいます。

引用 URL <http://www.shinsozai.com>

榎田倫之

1976 年滋賀県生まれ。
2001 年京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士前期課程修了後、株式会社日本設計入社。2003 年榎田倫之建築設計事務所設立。2008 年建築設計事務所「新素材研究所」を杉本博司と設立。現在、新素材研究所取締役所長、榎田倫之建築設計事務所主宰、京都造形芸術大学非常勤講師。杉本博司のパートナーアーキテクトとして数多くの設計を手がける。
現在、新素材研究所取締役所長、京都造形芸術大学非常勤講師、一級建築士。





東京懇親会 2018年12月15日（土）

第一部

●ワークショップ

「点描を味わう

邪心を捨てて無我の境地に浸る

・・・写経的ドローイングを体験する」

●先生の背中を語る会

「パパと呼ばれた男が語らなかったパパの話」

“田村蘊という芸術家の学生への言葉”

第二部

立食パーティー

冬の恒例行事となる「東京懇親会」が2018年の師走に東京外苑キャンパスで開催されました。第一部では田村蘊先生が晩年のライフワークとしていた「点描による写経的ドローイング」のワークショップと、田村先生の“背中を語る会”が開催されました。また、第二部は、各領域・分野 / 学科・コースの教員が参加する立食パーティーとなりました。

第一部前半のワークショップでは、秋の収穫祭や藝術学舎の講座で使用された田村先生の資料を元に上田篤先生がレクチャーを行った後、Jazzの「枯葉」が教室に流れる中での作品制作となりました。（写真1,2）

冒頭、ご家族のご好意でお借りした田村先生のスケッチブックが紹介され、手に取って自由に観ても良いとのことで大変貴重な機会となりました。（写真3）皆さんの制作作品は田村先生の点描作品とともに壁に貼られ、教室が展覧会場となりました。第一部の後半は、松井利夫先生が司会となり、上田先生と2006年度卒業生の大島玲子さんと2015年度卒業生の片岡智さんが加わっての“背中を語る会”となりました。（写真4）今回の参加者には田村先生を知らない方も多数おられたようですが、「先生の背中」を感じて頂けたでしょうか。

第二部は上田先生の乾杯の挨拶からスタート。今回は空デの申し込み者が30名以上おり、いつもはデザイン科で纏まっているテーブルから独立していました。そのテーブルの周りには久しぶりに同期生が揃うなど、多くの在校生・卒業生が周りには集まり、交流を深めました。最後は建築デザインコースの小杉宰子先生からの「東京オリンピックに向けて変わって行く周囲に負けないように学内を盛り上げて行きましょう」との言葉での中締めとなりました。



KUDE

卒業生の
自分時間

展覧会企画

2014年度卒業生の今泉幸子さんの企画による展覧会「北欧デザイナー 20人による茶道具『SKAL-うつわで乾杯』」が2018年10月3日から6日までの期間で東京都港区六本木のスウェーデン大使館にて開催されました。

この展覧会は、2013年から続いている「Scandinavian Pattern Collection」の文化交流イベントの4回目の企画とのもので、今回の企画では茶の湯で使われる茶道具に着目して20人のデザイナーが抹茶茶碗、懐紙、扇子のコーディネートデザインしました。なお、抹茶茶碗の原型制作を松井利夫先生が手がけられ、この原型をもとに京都の若手陶芸家・小坂大毅さんが手口クロで茶碗を仕上げ、それを波佐見の4つの窯元が各デザイナーの図案を手作業で絵付けしたものとのことです。また、懐紙は美濃和紙の透かし和紙、扇子は京都の老舗メーカーがハンドメイドで作られたものとのことです。

東京の展覧会の後は、10月11日から17日まで「京都市景観重要建造物」となっている「正庵」（京都市上京区）を会場として展覧会が開催されました。京都の開催にあたっては多数の空デ生が展示準備や開催期間中の会場での対応などのサポートをしてくれたとのことです。

北欧デザイナー20人による茶道具
『SKAL-うつわで乾杯』

【東京】

日時：2018年10月3日（水）～6日（土）

場所：スウェーデン大使館 ベルイマン展示ホール

【京都】

日時：2018年10月11日（木）～17日（水）

場所：正庵（京都市上京区）

主催：株式会社アンドフィーカ
Swedenstyle

後援：スウェーデン大使館、フィンランド大使館、
アイスランド大使館、波佐見焼振興会、
岐阜県紙業連合会

協賛：西川産業株式会社

協力：株式会社西田惣染工場、株式会社西山、
株式会社和山、有限会社一誠陶器、
有限会社藍染窯、みのや扇舗、
丸重製紙企業組合、
専門学校早稲田国際ビジネスカレッジ

器の監修：松井 利夫

（京都造形芸術大学教授、滋賀県立陶芸の森館長）

空デ2018大忘年会
京都・東京

食うで

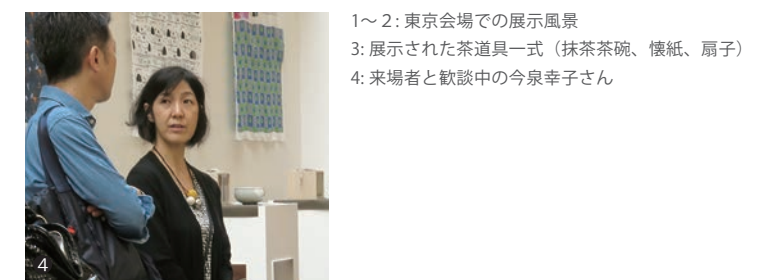
毎年年末の恒例となった「空間演出デザインコース（空デ）大忘年会」が2018年の年末に京都・東京でそれぞれ開催されました。東京では今まで小規模な忘年会・新年会が開催されているような状況でしたが、今回は「田村蘊先生を偲ぶ会」という名目もあり、多くの在校生・卒業生有志が集まる大規模な忘年会となりました。

東京での「空デ 2018 外苑大忘年会」は12月15日の東京懇親会終了後に港区青山一丁目の「銀座ライオン」で開催されました。上田先生、川合先生、そして東京懇親会の第二部に参加された方を含めて総勢50名ほどが参加しました。

京都での「空デ 2018 大忘年会」は東京開催の翌週12月22日に京都市左京区元田中の「天寅」で開催されました。こちらでは上田先生、川合先生とともに岡本先生、寺尾先生、伊達先生、藤原先生、宮地先生らも加わり、総勢60名ほどが参加しました。

東京では東京懇親会に加えて卒業制作スクーリング開講日だったため、その流れで忘年会に参加される方が多かったのですが、京都はスクーリング開講日には無いのにも関わらず、京都近郊だけでなく、遠方から参加された在校生・卒業生も多数おられました。なお、京都では日中に上田先生他、有志で田村先生のお墓参りに行かれたとのことです。

また、京都・東京とも会場に田村蘊先生の写真が飾られるとともに、京都では田村先生の「お言葉」が流れ、田村先生とともに（？）「一本締め」が行われました。皆とビールを飲みながら話すことが好きだった田村先生がいるような楽しい時間でした。京都・東京とも幹事のみなさま、お疲れ様でした。

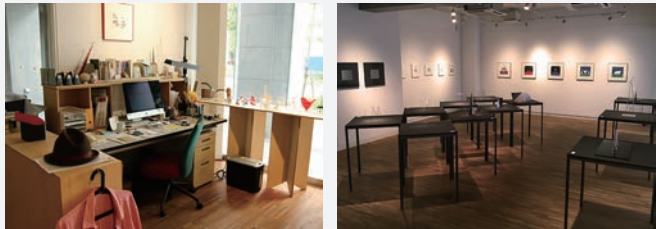


1～2: 東京会場での展示風景
3: 展示された茶道具一式（抹茶茶碗、懐紙、扇子）
4: 来場者と歓談中の今泉幸子さん

参考 <http://scandinavianpatterncollection.com/news/skal.html>
<https://swedenstyle.com/2018/09/skal-exhibition/>
<https://swedenstyle.com/2018/09/machiya/>

編集室が選んだ空デ出来事 @2018 年

2018 年は空間演出デザインコースにとって衝撃的な出来事がありました。それを含めて編集部の独断で 2018 年の出来事をピックアップしてみました。



巨星墮つ・田村蘊先生ご逝去

空デのパパとして長きに渡って学生たちを見守ってきた田村蘊先生が 2018 年 8 月 4 日にご逝去されました。一週間前までスクーリングで学生を指導されていたとのことで、突然の訃報に驚きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。その田村先生の作品や 45 年間に渡る教員生活での素顔などが伺える展覧会「眠らない机」が大学のホームカミングディ関連企画として田村先生を慕う有志のご協力のもと 2018 年 9 月 15 日から 23 日までの期間で開催されました。期間中は毎日多くの在校生・卒業生が訪れて田村先生を偲びました。



最多入学者数を更新

2018 年度の新入学生は 1 年次入学者・3 年次編入者合わせて 119 名となり、過去最多の入学者数となりました。夏の暑さも加わり、スクーリング中の教室では学生たちの熱気に溢れていました。

KUDEオープンゼミ



京都・瓜生山キャンパスでしたらBREATH KUADのコーヒーを飲みながら課題など

オープンゼミでは、履修方法やテキスト科目、その他なんでも相談を受け付けています。気軽に相談に来てください。

■京都

日時：2019 年 2 月 2 日（土）17：00 ～ 19：00
会場：瓜生山キャンパス人間館 1F ラウンジ
担当教員：上田篤、岡本正人、他

■東京

日時：2019 年 2 月 9 日（土）17：00 ～ 19：00
会場：東京外苑キャンパス 1 階エントランスホール
担当教員：川合健太、他

※事前申し込みは不要です。参加希望者は時間内に直接会場へお越しください。また、日程・会場が変更となる場合がありますので、コースサイトで事前に確認してください。



卒業・修了制作展にて空デ生が 4 年連続学長賞を受賞

2017 年度の卒業・修了制作展は 2018 年 3 月 12 日から 19 日までの期間で開催されました。昨年同様前日 11 日には尾池学長による審査会が行われ、各コースの代表作品の中からデザイン科では石津陽子さんの作品が学長賞に選ばれました。今回で空間演出デザインコースは 2014 年度から 4 年連続での選出となりました。

空間演出デザインコース 特別講義のお知らせ



「ある時は、足元を照らし、行く先を指し示す、ある時は、場をあたため、仲間と知恵の集まる抛りどころとして、ささやかな灯火（ともしび）を、一人ひとりの心の中に、灯していく」をコンセプトに、国内外でさまざまな空間プロジェクトに取り組む TAIMATSU の松尾宗則さんと松尾遥さんにそのヒューマンなお仕事のプロセスをお話いただきます。

タイトル：一人ひとりに灯火（ともしび）を
講師：松尾宗則先生（建築家、TAIMATSU 代表）、松尾遥先生（建築家）
日時：2019 年 2 月 2 日（日）18：00 ～ 19：30（予定）
※ 事前申込不要。どなたでもご参加いただけます
会場：東京 外苑キャンパス
※教室については当日の掲示を確認ください

TAIMATSU のプロフィール

国内はもとより西アフリカ・ガーナ共和国の小学校、幼稚園などさまざまな建築プロジェクトを手がける。

右：松尾宗則（建築家）

早稲田大学商学部卒業、早稲田大学芸術学校卒業。鈴木恂 +AMS、SUDA 設計室

勤務を経て、2013 年、SUPERPIXEL Architects Studio 設立。2018 年、

TAIMATSU 設立。京都造形芸術大学非常勤講師。

左：松尾遥（建築家）

文化女子大学造形学部卒業、早稲田大学芸術学校卒業。MTA/ 高橋真建築設計事

務所を経て、2017 年、FAR/ 鈴木遥一級建築士事務所設立。2018 年、

TAIMATSU 設立。京都造形芸術大学非常勤講師。

2018 年度卒業制作 最終審査聴講



作品に加えてパネルや冊子などを用意してプレゼンテーションを行います

「卒業制作 6」で開催される最終審査は在校生（休学生含む）・卒業生が聴講出来ます。来年度以降に卒業制作に着手予定の方は参考になると思いますので、是非聴講ください。事前の申し込みは不要ですが、休憩時間を除いては、審査中の入退室はできませんので、開始時間までに各教室へ集合してください。

日時：2019 年 1 月 27 日（日）10：00 ～ 15：00（予定）
※開始時間の 10 分前にお集まりください
会場：京都 人間館 NA 棟 / 東京 外苑キャンパス
※教室については当日の掲示を確認ください

2018 年度 卒業・修了制作展



2017 年度卒業制作展の一コマ。卒業着手者説明会にいられた学生を対象に見学ツアーが行われました

2018 年度卒業・修了制作展（通信教育課程）が以下の日程で開催されます。詳細については、2/25 発行予定の『雲母』2 月号、および airU キャンパスにて確認してください。

日時：2019 年 3 月 10 日（日）～ 3 月 17 日（日）
11：00 ～ 18：00（最終日は 16：00 まで）
会場：瓜生山キャンパス ギャラリー・オーブ、芸術館、人間館 NA 棟

また、デザイン科では Web 上でも卒業制作展を開催します。こちらは会期が 6 月末までとなっていますので、瓜生山キャンパスでの卒業制作展が観れない方、あるいは再度ゆっくりと作品を確認したいという方は airU キャンパスのリンク先へアクセスしてみてください。

掲載期間：2019 年 3 月 10 日（日）～ 6 月 30 日（日）

編集室から



東京懇親会取材中の矢野かほる先生

- 昨年の 12/1（土）に京都瓜生山キャンパスにて、今年度のラストスパートとして研究室主催で「空デ SOO（スペシャル追い込みオープンゼミ）」が開催され、来場者は今年度内の提出目標などの学習計画の誓いを立てたとのことです。2018 年度も残り三ヶ月を切りましたが、課題の提出チャンスは未だありますので、少しでも多くの課題が提出できるよう、最後まで諦めずに学習に取り組んでください。
- 卒業生には裏表紙のコラム「もてなし時間」の投稿をお願いしていましたが、卒業後の活動も少しずつ掲載して行きたいと考えております。また、従来通り、在校生の学習会活動なども記載して行きますので、記事ネタがありましたら、編集室へご連絡ください。ご協力をよろしくお願いいたします。（森）【表紙の色 群青色（ぐんじょういろ）】

お正月



「日本のニューイヤーはいつなの？」

もうすぐ三歳になる長女が通っているナーサリー（日本でいう幼稚園）の先生に言われた一言。どうやら日本のお正月というのは、世界的に見れば珍しい時期のようだ。他の国では、一二月三十一日のカウントダウンで盛り上がり、一月一日は祝日だが二日から通常通り。お正月三が日まで楽しむのは、日本だけ。

夫の海外転勤に帯同し、マレーシアに住んで二年半。マレーシアで一番驚いたこと、それはお祝いイベントが沢山あるということだ。多民族国家と言われるマレーシアの人種は、マレー系、中華系、インド系の三人種で大別され、移民も多い。それぞれの民族や宗教を大事にするため、いわゆるお正月は三つある。イスラム教徒の『ハリ・ラヤ(Hari Raya)』、中華系民族の『旧正月』、ヒンドゥー教の『ディーパバリ(Dee-pavali)』である。さらにはキリスト教の『クリスマス』も盛大に盛り上がるイベントだ。

娘の通うナーサリーでは、すべてのお祝いを体験することが出来る。その時期になる前にそのお祝いについて学び、装飾が飾

られたナーサリーに、子供用の民族衣装を着て、風習に合わせた食事やイベントを体験する。

民族や国籍は違えど、それぞれの宗教や文化を尊重し、学び、共存し、多様性を受け入れるのがマレーシアなのだ。その中で、ナーサリーの先生が日本のお正月を知りたいと思い、それを子供達にも教えてあげたいと聞き、私はとても嬉しく思った。

と同時に、私が日本の行事や文化を理解し、自分の子供達に日本を知ってほしいという想いが強くなった。ともあれ今は、肌の色や言葉が異なる子供達と一緒にマレーシアの様々な文化を楽しんでほしい。いつか、大きくなった時に思い出を語りながら話してみたい。

マレーシアは年中真夏の三〇度なので、日本で過ごすお正月とはかけ離れたものになるが、それでもおせちのようなものを食べながら、出雲大社マレーシア支社に初詣に行く、という日本人らしい振る舞いをしていることだろう。

二〇二二年度卒業生

山村さやか
(文・写真)

もてなし時間

